

# 道徳への善アプローチ

——倫理道徳論の新構築をめざす——

永安 幸正

## 目次

- 一 主題
- 二 善の種類と構造
- 三 善の再生産としての倫理道徳
- 四 善、倫理道徳及び因果律

## キーワード

善、悪、私的善、公共的善、恵み、恩、報恩、倫理道徳の公理、自律、正義、無危害、仁恵、倫理原理、自我没却、義務  
先行、報恩、慈悲、因果律

## 一 主題

### (一) 人類の基本価値と善

マハトマ・ガンジーの『自叙伝』を読むと、こんなことが書かれている。あるとき子供のころ「どうなるか」と禁断の牛肉を食べてみた。とっても気分が悪くなり、良心の呵責はどうしようもないほどであったという。ガ

ンジールはいうまでもなくヒンツール教徒かつ菜食主義者であり、牛肉、いな一般に肉を食べるということは、ご法度として育てられたのである。

価値を含む文化というものが、生理的反応までをも方向づけるのである。

我々は、小さいときから、それぞれの文化の海の中で、善悪の基準にそって育てられ、時に善悪に迷い、善悪に悩み、善悪のガイドラインに導かれながら育つ。

人類は、理想・当為より以前と、理想・当為との間を、揺れながら歩み続ける。

「悪いことを避け、善いことをしなさい」

「物を大切にせよ、もったいない」

「他人に迷惑をかけてはいけません」

というのは、子育てにおける親の口癖である。「人に嘘をついてはいけません」などとならんで、「しつけ」の基礎的標準はこういうところにあつたとさえ言える。恩とか、感謝とか、神仏を信じる、ということも教えられた。

ところが、古代日本人の文化を象徴する『古事記』には、須佐男命が天照大神に反抗し、田圃の畦を切ったり、動物の革を剥いで機織りをしている家に投げつけるなど、乱暴狼藉を尽くす話が出てくる。それは他人のいのちを奪うことよりも重い罪だとされる。一方、近世の武士道では、赤穂浪士が吉良上野介を襲って首を取ったが、その行為は、ドラマのうえで今なお庶民から称えられる。

一体、善し悪しには、時を越えて何か基準があるのか、それは何なのか。

さて、古来人類には、一般に真、善、美という実現すべき基本価値 (primary values) があるとされている。これに利と聖を加える立場もある。いずれにせよ、善は人類の基本価値の一つである。

第一に、真とは真理 (truth) のことであり、科学が探求する価値であり、対象に関する情報を正確に獲得している状態、また獲得された情報をいう。さらに推論のようにその情報の操作・加工において、正確さ・一貫性があるということもある。これを「事実に関する真理」に対して「推論の真理」という (ライブニッツ)。

宗教でも、我こそは真理を語るという人があり、真理とは何らかの宇宙自然の法則とか神仏の示す摂理とかを意味し、それに関する正確な情報を指すこともある。

第二に、美 (Beauty) とは芸術の追求する価値であるが、ただ美とは何か、それを定義するのはなかなか難しい。人間の心身の外部からの情報刺激が心身の内部に何らかの快感を生み出すとき、特に視覚と聴覚に快感を生み出すときに、どうも我々は美というように規定するようだ。芸術家は「ヒーラー」 (癒しの専門家) だということもある。彼らは大変苦勞して旅をし人々の癒しになるものを探してくるのである。

美は視覚と深くかわるが、それ以外の感覚では、あまり美とはいわない。例えば味覚では美しい味といわない。美味しいとはいわない。触覚では美しい手触りとはいわない。柔らかな手触りとはいわない。嗅覚では美しい香りとはいわない。よい香りとはいわない。美とは、主に視覚と聴覚に入ってくる情報から生まれる感覚にかかわるもの

ようだ。美しい文章とは言う。これは、書かれた文字またはその朗読音から入ってくる情報が作り出す情報感覚が視聴覚に映ずるときに、その映ずるものを指すのだといえる。

第三に、利(interest, profit)とは利益という価値のことで、利益には利潤というようなビジネスの価値もあるが、富一般でもあり、また必ずしもビジネスの価値ばかりではない。利益一般にはいろいろなものが含まれる。医は仁術というとき、医者は患者の利益を無償の努力を払って増大させるといふことを意味している。ここでも利が関係している。利といっても金儲けのことばかりではない。広くご利益(りやく)ともいう。

利という観念は、人間のいのちに役立つ物事と行為一般を表す。役立つ、有益であるという観点からみれば何でも利という価値から評価することになる。功利(utilitas)という観念もあるが、これは対象が人間の心身に情報変化を生み出し、それが人間の内部に満足という心理生理上の効果を生み出すとき、その満足をいう。

第四に、聖(sacredness)という価値は、何かを神仏とか天地自然とか、ともかく超越的なものと結び付け、超越的なものの価値をその何かに付与するとき現れる。その価値を聖なる価値と呼ぶ。これは、いわば究極的な価値づけであろう。

一人の旅人が、石工が仕事をしているそばを通りかかり、「何を作るのですか」と尋ねたそう。石工は答えた、「あの山の上に教会を建てます」と。だから石工の労働は神聖な労働であると称えられた、とこういう話がある。これは、人間の労働に神聖なるものとなしものとの区別をつける立場である。

## (二) 倫理道徳は善悪の価値にかかわる領域

そこで、善とは何かである。善も真、美、利、聖などとともに、人類にとっての基本価値である。善とは、「人類のいのち」にとって有益なものにかかわる事柄であるようだ。手元の辞書によると、善とは、次のような意味を表すという。

よい  
よいこと  
なかよくする  
よく  
てあつく  
十分に

(『日本語大辞典』講談社)

正理になかったこと  
道徳になかったこと

よいこと  
このましいこと  
すぐれたこと  
たくみなこと

前の辞書の説明よりは、こちらの定義が少しだけ本格的である。正しい法則・基準に適合したこと（人間の行為つまり心づかいと行動）が善であり、道徳（行為としての）であるとされる。

また、「たくみなこと」までは含められるが、「美しさ」は含められていない。なぜか。我々は、よい美しさというであろうか。あまり言わないが、怪しい美しさという。美について、善いか悪いかの区別を行うことができるのである。我々は、真、利、聖についても、善いものかそうでないかを、ときには判断するようである。

この辞書は一流と自他ともに認めるものだが、編者の説明は世の中の言葉使いの収集としては、いささか不十分である。「何か」を指して「何か」に適合する人間の「行為」にしか焦点を当てていない。善の一部しかとらえていない。「何か」について、何も語っていない。その「何か」こそ大切なのである。善の十全な説明は、のちに行いたい。

世界の倫理道徳では、すべて、人類の生き方を、特に「善悪価値」にかかわらしめてとらえる。人類の世の中では、個人の生から死までのいのちの流れにおいて、また戦争と平和のように人々のいのちといのちのかかわりにおいて、善という観点がどうしても欠かせない。

結局、倫理道徳（学）とは、真にも、美にも、利にも、聖にも、すべて関係するが、それらを統一的に「善」（あるいは悪）にかかわらしめて意味づけする。そのうえで、善を探索し増加し、他方で悪を減らす、という「生き方」の原理であり、その原理に基づく人間の行為（心づかいと行動）である。

また、学問としては、その原理を研究解明し、人生にとつての善を実現する実践指針の開発であり、教育としては実行へのいざないである。そして倫理道徳とは、善を目指すところの生きる実践（研究と学習を含む）そのものである。

例えば、「美」という価値でも、それが時に人類を退化させ、「善」を破壊、減少させる作用をもつ。えもいわれぬ美しい女性が、男性を籠絡し人生を破壊させることがある。もちろん、男性がそういう役を演じることも多い。不倫はそういう現象に近いものであろう。ちなみに「源氏物語」は不倫物語かどうか。その道徳価値は何か。これはやばな質問なのだろうか。美と芸術は偉大なプラスの働きをするが、いつも善なる働きをするものばかりとはかぎらないようだ。

「真」も（技術と結合して）、経済における「利」も、宗教における「聖」も同様に、それらがいつも善を生み出すとはかぎらない。宗教ではしばしば、教理そのものに危険をはらむ種類のもが出てくる。宗教は歴史のテストを受けたものでないと、なかなか信用できない。利は、しばしば義（正義）と利との合一が呼ばれるように、善と相反するものである。

倫理道徳とは、人類の行う芸術にも、学問にも、宗教にも、経済にも、政治にも、善悪からの判断を加えるものである。したがって、倫理道徳から見れば、芸術至上主義というような「何々至上主義」なるものは採用されない。「芸術には芸術の価値があるから、他の価値観点から批判や規制を加えるのはもつての外である」というの

が芸術至上主義である。同様に、科学至上主義も、経済至上主義も、宗教至上主義も、すべて善からの判断を避けるわけにいかないことになる。

人類の行うことはすべて、人類のいのちにとって有益かどうかで評価されるのである。

## 二 善の種類と構造

### (一) 善の種類

では、人類における善とは何か。どのような種類の物があるか。それは、次のように言えるであろう。

善とは、第一に目指すべき「対象物」である。これはさらに二つに分かれて、「目的としての善」(究極的善)と、それを実現するための「手段としての善」(派生的善)とからなる。

第二に、そうした目的を実現しようとする人間の行為・働きも善である。そのとき、手段としての善を用いるから、その用いる行為も派生的に善となるわけである。

哲学者の西田幾太郎は、『善の研究』で、善とは何かについて、おおよそ次のように述べている。

善とは、自己の発展完成である。すなわち我々の精神が種々の能力を發展させ、円満なる發達を遂げるのが最上の善である。竹は竹、松は松と各々その天賦を十分に發展するように、人間が人間の天性自然を發揮するのが人間の善である。

これは私的な範囲での究極目的としての善のことである(ただし、精神にしか目を向けず、肉体のことが抜け

ている)。こうした善の考えは、すでに古代ギリシャの万学の天才、アリストテレス先生の『ニコマコス倫理学』にもっとも明確に現れているのである。キリスト教も後に、このようなアリストテレス学説を取り入れていく。

すべての存在物にはその物本来の「徳」(アレテー、卓越性、人間でいえば器量とか品性や品格)というものがある。徳そのもの及び徳の実現が善である、とこういう考えである。

〔註〕善の問題を論じるときには、村井実教授の「善さ」説の主張を無視することはできない。教授によれば、『価値と呼ばれるものが、決してアリストテレス以後の伝統的な考え方のように「真」「善」「美」「聖」等、それぞれ独立してあるのではなく、かといって、最近の考え方のように単純に人びとの好みや選択による「価値づけ」(valuation)にまかせてあるのでもなく、元をたただせばすべて一つの「善さ」、つまり人間のすべてが生まれついて求めている、その一つの善さから人びとの生活に即して「文化」として派生したものに対応させたそれぞれの名称、およびその総称である。

### (二) 目的としての善 (目的価値 objective values)

善には、実現すべき目的価値としての善と、その目的実現に使用する手段価値としての善とがある。これは古代ギリシャのアリストテレスが『ニコマコス倫理学』で最も体系的に論じたところのもので、爾來、世界の倫理道徳論ではその伝統が主流となったといえる。現代では、即目的価値(consummatory values)と、手段的価値

あり、本来は一つとして「善さ」と呼ぶべきものさまで、まな現れに対応させた名称にすぎない」と言われる。『善さ』の復興(東洋館出版社)一九七ページを参照された。

村井教授の説は、それ自体として一貫した体系性を備えているが、私の定義する善と教授の「善さ」の概念との比較は興味深い。私は「いのち」の存続發展そのものと、それに必要であり有効であるものと、それを調達実現する人間の「行為」を引くくめて善と呼ぶ。本格的な比較検討は今回のここでの課題ではなく、別の機会に譲りたい。

(instrumental values)とを対比させる。

目的としての善は、個人と社会の善からなる。善には、個人にとっての幸福(個人的な善)と、個人の集まりとしての国家、家など、社会団体の平和発展(集团的・社会的善)とからなっている。私的な目的善を個人の安心・喜び・生きがいとし、社会的な目的善を各人のそれらの共存とすれば、目的善はこの私的善と社会的善とからなる。

この目的としての善に何を含めるかにより、倫理道德の異なる学説あるいは体系ができることになる。目的には幸福、安心、善財、往生、永生、などが掲げられる。

目的善は、根源的には「いのち」そのものといってよい。存在すること自体が価値であるとはしばしばいわれるが、そのときは「いのち」としての存在を指している。

また、「いのち」とは、心身善の全体であるが、精神善と身体善とからなる。そのうち精神善は心の状態であり、理性(知能と知恵)、感性(その働きが感情)、良心(その働きが意志)に現れ、安心と喜び、生きがいという幸福感を生み出す心理的な要因である。

普通、幸福というときには、この精神善のことであり、その内実は「幸福感」である。幸福とは幸福感到にほかならない。

次に、「社会公共的な目的善」というものを無視してはならない。そして問題は、こうした私的な目的善を、社会の一人一人の構成員がどれだけ実現しているかなのである。社会公共的な目的善は、私的善の合計といふよりその共存であり、共存の基礎に私的善に還元されない社会公共善(共通善 social overhead goods/commons)が介在する。

ここには注意すべき点がある。何かというと、健康のための散歩の途中に清浄な空気を呼吸し「さわやかな気分」になることは私的な幸福感にとって重要要素であるが、清浄な大気が地球に存在することなしにこの私的な幸福感はありえないという事実である。このとき清浄な大気は社会公共善である。しかし、往々にして倫理道德の専門的議論では、こうした社会的考察が抜け落ちることが多いようだ。

なお、ジェレミー・ベンサムの述べた「最大多数の最大幸福」(古典的な功利主義)か、ジョン・ロールズの「格差原理」(功利主義批判の武器)か、という対立の問題が存在することを指摘しておこう。つまり、他人と自分を比較する各人の精神状態により、社会的善の値は変わる。他人の幸せを喜ぶか、妬むかは、影響が大きいのである。<sup>註</sup>

他者の状態と幸福感を各自がどのように受けとめるか、それに関して各人が各人なりにどんな心理構造をもつかは、各人の幸福感到に大きな影響を与える。

を参照。異なる人との間で幸福判断が比較できるものかと　うかは、決着をみていない議論である。

### (三) 手段としての善 (手段的価値: instrumental values)

次は手段としての善である。これには、私的個人的な善と、社会的公共的な善がある。まず、私的な手段善には次のものがある。

「身体善」は、いわゆる各人の体の働きと健康であり、その持続としての長寿ということになる。我々は、健康で生きがいと満ちた長寿を願う。しかし長寿は実現した、長寿はもう重要価値ではない、ともいわれる。だが、老人はみな、自分がいつ痴呆になるか、いつ寝たきりになるか、不安なのである。健康長寿の価値はますます重大となるのである。

次に「関係善」とは、人々との社会的な、人間関係において現れてくるものであり、地位・名誉からなる。

我々は、自分の個性と能力にふさわしい地位を得て働き、人々からの評価(名誉)を得たいと願う。これも喜び、生きがいを生み出す要因の一つである。

富という善はどうか。我々人類は生命体である限り衣食住を必要とし、将来への安心のためにもその蓄えを求め。この富も安心、喜び、生きがいの一要因である。幸福と豊かさは必ずしも比例しないが、宗教の達人とか清貧の思想の実践家は別として、世の多くの人々にとっては無関係ではない。これが、世界中の人々が血眼になって経済発展を追求しているゆえんである。この支配的な事実を視野から外す幸福論や倫理道徳論には、気休

め程度の有効性しかない。

さらに、「子孫繁栄」は、我々人類のほとんどの共通の願いであるといえるだろう。自分のいのちを後世に伝え繁栄させることは、安心、喜び、生きがいの重要な要因なのである。

この子孫繁栄は、人類の幸福論において特別の意味をもつ。つまり、親にとっては、子供は安心・喜びを生み出す手段善であるが、いのちの観点から見れば、親は子供に自分のいのちを継承してもらうのであり、この継承が自分の人生の終極目的ともいえるのであり、その意味から子孫繁栄は究極目的なのである。

だから、親は時として、自分のいのちをかけて子供を守るのである。自分の今のいのちは、子供のいのちにとって手段として投入されるのである。そのように投入することが、親自身において安心・喜びを生み出すことにもなるのである。<sup>(註)</sup>

〈註〉釈迦は次のように述べる。

「子のある者は子について憂い、また牛のあるものは牛について憂う。実に人間の憂いは執着するものものである。なかれ、況や朋友をや。犀の角のようにただ独り歩め。」(中  
執着するものものない人は、憂うことがない。」「あ　村元訳『ブッタのことは』岩波文庫、一七ページ)

以上は個人的、私的な意味での善であるが、我々の世の中には他の人々があり、そういう人々との共存を通じてはじめて、我々のいのちは生存発達できる。したがって、我々には社会公共的な手段善が必要である。これは、

社会の構成員が私的に所有できないが、社会としては備えるべきものである。これを「公共善」と名付ける。社会科学では公共財と呼ぶ。それは次のようなものからなる。

まずその第一は「物的公共善」(ハードウェア)であるが、これは社会の各人が生存して行くうえで不可欠な地球環境、国家の領域(国土、領海、領空)、それに物的な社会共通資本(インフラストラクチャー)からなる。現代の文明では、地球環境が危機に瀕しているとだれもが認めているから、地球環境の保全行為あるいは保全された地球環境は、ほとんど目的善に近い重要性を帯びている。

次は社会の制度であり、憲法からはじまる法体系と、慣習(法)、礼儀作法などの倫理道徳、そこに含まれる価値観である。ソクラテスは、アテナイの国法を遵守して毒盃をおいだとされるが、それは手段としてそうしたのである。彼の究極目的は彼自身のいのちの価値を完成し、それが真理・正しさの確保のために殉じることにある。その(逃れるべきでない)手段として毒をおいだのであるといえる。ソクラテスにとり、国法を遵守することは彼の究極目的から派生した必須の善であった。

また、社会のこうした制度は「文化」(ソフトウェア)と不可分である。文化には、知識・知恵、風習、宗教、芸術、科学技術、技能、また教育なども含まれよう。

最後に、一番ウエイトが小さいというのではないが、社会の秩序の静けさという意味での「平和」も公共善である。平和とは、各人の私的善と社会の公共善が暴力により侵害されることのない状態である。平和の中には、フェアプレーである限り、競争を通じての優勝劣敗、弱肉強食が含まれる。

以上のような善を実現する各人の精神と行為、それに社会の仕組みと状態は、究極目的である安心・喜び、つまり幸福感という精神善を実現するための「手段としての善」である。こうした「手段善」をどのように組み合わせるかによっても、異なった倫理道徳説があることになる。

#### (四) 究極善と派生善、及び行為善

個人でも会社や国家などの団体についても、「よい行い」、「よい考え」などという。あの国は信頼できる国である、危害ばかりふりまく国である、などといった評価も我々は加える。また、「よい制度」、「よい社会」、「よい文化」などもいう。個人の幸福実現にとっての手段である限りにおいて、それら手段もまた善価値を帯びることになる。

これらが善であるのは、各人の善を実現する動機、目的、方法、結果からみて、ある心づかいと行動が、はじめに述べた「目的としての善」を実現している、あるいはしつつかあるからである。

「手段善」という見方は、終局的には結果論の立場に立つ。動機、目的、方法だけがいくら善の方向を目指している、最終結果が判断を最終決定するからである。

ここで、注意すべき重要な点がある。

普通、道徳とは善い「行為」(心遣いを含むもの)のことであるというが、そのとき、「善い」とは、まず目的善を実現するための自然界の法則、社会のルール、そして生理心理の法則に順うという意味である。それだからこそ善い行為といわれるのである。



その法則・ルールとは、それに順えば目的善を実現するための最適の道となるものことである。

また、同じく重要なことであるが、我々の現実の心理においては、こうした善を実現する行為も善ということになる。そこで、目的善を直接に実現する行為はそれ自体も目的善だといわれる。「生きがいを実現する行為も生きがいの中に含まれる」ということになるのである。

「幸福とは幸福を求める努力そのものである。」

これは何も言っていないように聞こえるが、人間の心理を見事に映し出した真理の言葉である。

山の頂上に登ることが目的で一生懸命に登っているとき、途中の「登ること」自体（手段手続き）もまた、生きがいに含まれる。最終目的に繋がっているからである。目的と手段とは、論理上は区別されるが現実には不可分となる。

この点を考えるとき、特に目的を実現しようとする行為の途中の精神・方法も重要とされることに着眼したい。なぜなら、人間の行為は、時々刻々、精神作用が行われ、それが心身に作用をもたらすからである。山登りでは、山の頂上に立つことが目的であるが、それまでの途中の一步一步で、何を考え、いかに心身を使うかが、途中の結果を生み続けるからである。結果には、最終的に頂上に立つことだけでなく、途中の心身への作用も含めねばならない。

昔から「随所に主となる」、「今ここに」、「一隅を照らす」という。これは、時の次元から見るとき、すばらし

い積極思考であり積極生活の表現である。これは最終目的に至る「途中での行為善」の価値に注目を促すものである。

なお、善の議論をすれば、どうしても悪の問題が浮上する。

善に対する悪とは、マイナスの善であり、善の欠如であり、破壊であり、不善である。社会の法は、これを法に違反する「罪」（クライム）あるいはそれに近いものとする。その根底には、神仏の心への違反としての「罪」（シン）がある。悪は、手段としての善についてもいえる。我々は、悪い方法とか行動などという。

悪の定義には、古来、さまざまなものがある。悪魔の仕業、悪魔のそそのかしによる人間の行為、といった見方もある。<sup>(註)</sup>

しかし、悪の問題はあまり複雑に考える必要はない。要するに、我々が悪と見なすものは善の反対価値を帯びるものなのであって、先にあげた善のリストに載る各種の善の破壊・毀損、つまりマイナスの善ないしはその生産行為であり、そこまできかなくとも生み出すべき善を生み出さないこと、つまり「善の不生産」（不作為）といったものである。怠けを批判し精勤を勧める倫理道徳は人類に共通であるが、ここにそのゆえんがある。また、そうした悪を生み出す行為も悪という。

〈註〉釈迦の言行録にも、悪魔への言及がある。

「盗みを行ってはならぬ。虚言を語ってはならぬ。弱いも  
接せよ。心の乱れを感じるときには「悪魔の仲間」である  
とも思つて、これを除き去れ。」（『ブツダのことは』岩波文  
庫、二〇七ページ。）

釈迦の言葉の記録、あるいは当時の人々の観念には、悪魔のそれが見受けられる。我々現代の日本人は、寛大だというか、あまい思考が好きというか、白黒をはっきり区別したくないというか、「悪魔」を持ち出すほどには悪の決

めつけにおいて徹底していないのではないか。それは、日本文化の幸せな面と困る面とにかかわる。善悪の観念を文化ごとに比較すれば、倫理道德の基本点の比較になる。

### 三 善の再生産としての倫理道德

#### (一) 善のコスモロジー

世界人類に共通に見られる思想がある。それは次のようなものである。

宇宙・地球——文化によつては、あるいは天地、あるいは神仏とされるもの——は我々人類に「無償」で空気を恵み、そのお陰で我々はいのちを営むことができる。空気は人類の「いのち」を養う善の種子である。

宇宙自然・地球システムは、人間の観点からすると、日夜、善を創造し、それを人類に恵む働きをしている。個々の人間に生があり死があろうとも、大きないのちの世界から見てマクロ的にはこのように言える。

人類は、いかに万物の霊長とうぬばれても、自然界の働きに絶対的に支えられている。空気ひとつ創造することとはできない。生命に至つてはいうまでもない。人類から見れば、宇宙自然は善を創造し生産し、善の種子を恵んでくれる母であり父である。父母である。宇宙自然は、遠い昔、生命を生み出し、人類を生み出し、我々のいのちを支えるものを与えてくれている。

人類は「宇宙・地球の一員」として、そういう宇宙自然・地球システムの働きと恵みに順応同化し絶対服従し、人類なりの正しい善の増加と分配に勤しむ。これを天工開物、天工を扶けると言つて来た。これが人類の道德というものの根源である。西洋では、人類は神により神の愛の実行へと遣わされているという考え方もある。これは、一つの「善のコスモロジー」(善の世界観 *cosmology*)である。その基礎に、後に述べる無矛盾的な道徳法則観(一神教・自然科学と同一の性質のもの)が存在する。

人類から見た宇宙の目的は、「宇宙的正義」の実現にある。

ここにいう正義とは、次のような調和・バランス、中庸・平均・公正である。人間の社会のみでなく、地球の物質エネルギー系も生命系も含めて、地球的、宇宙的スケールで考えた正義である。宇宙的正義は、次の四層のバランスからなる。

- ①物質界の調和 これはいのちの基礎。人間界はこれを忘れてはいけない。
  - ②生命界の調和 生きとし生けるもののバランスを尊重する。人類はここまではよく考慮してきた。
  - ③人間界の調和 人間だけではなく、物質界、生命系を尊重する。
  - ④これらの調和 これら全体の統合と調和。
- この四つの調和の全体を宇宙的正義と呼ぶことにする。

人類は、地球上の物質エネルギーと生命系の微妙なバランスの中に、辛うじて生存を許されている。大気の組成が少し変化し、地球上の気温が変化すると、たちまち大混乱が起きるであろう。飢饉どころではない。呼吸さ<sup>注</sup>えままならないことになる。人類としては、現在の惑星地球のバランスを変化させないことが至上命令である。

〔註〕地球科学では相当以前から論じられてきたが、地球環境問題の深刻化とともに、こうした物資エネルギーと生命のバランスの問題に世間の大方の注意を向けさせたのは、かの「ガイア仮説」である。J・E・ラブロック『地球生命圏』工作舎、を参照。また、より科学的に突っ込んだ議論はエリッヒ・ヤンツ『自己組織化する宇宙』工作舎。ジョン・グリビン『宇宙進化論』麗澤大学出版会。

それでも最近では地球科学による研究が進み、地球システムのダイナミズムが解明されつつある。鳥海ほか『地球システム科学』（講座、地球惑星科学第二巻）岩波書店、松井孝典『二万年目の人間圏』（ワック出版部）などを参照。また、物理化学の研究のほかに、生態学の観点からと、もっとミクロの遺伝子研究のレベルでの生命系のバランスの研究も重要である。

もちろん、この調和・正義は、長期的には宇宙の進化発展とともにダイナミックに変化していくものである。宇宙も、地球も、生命界も、人間界も、たえず動的であり諸行無常 (ever-changing) である。

例えば、地球のいのちを支える大気の成分は、地球自身の働き、多くの生物の働き、人類の活動により、少しずつ変化してきたし、今も変化しつつある。地球の寒冷化と温暖化もその例である。

我々にとつての緊急の意味を帯びる宇宙的正義の問題とは「現在の地球」のバランスを維持することである。これをいかにしても維持することである。これは人類のエゴというよりも正当な願望である。

人類は、このバランスを外れると生物として生きられないから、現在の地球のバランスを大きく変えないようにするほかない。

そのバランス維持を「持続的發展」(sustainable development) という<sup>註</sup>。宇宙的正義とは、単に人間の間の公

正と均衡ではなく、なにより、地球の「今日」のバランスを指す。

〔註〕持続的發展(開発)という考えは国連発のものである。いわく、

在の世代の欲求をも満足させるような開発をいう。(Our Common Ground, Oxford University Press, 大来佐武郎監

訳)「地球の未来を守るために」福武書店、六六ページ)

ところで、宇宙論に人間原理とか人間主義 (anthropocentrism, universal humanism) というものがある。宇宙に心があり意志があるかどうかは何とも言えないけれども、宇宙の中に太陽系が生まれ、その中に地球の生命系が生まれ、その生命系の中で人類が生まれ、そうして生み出された人類は宇宙進化の最頂点・最高位にある、と考える<sup>註</sup>。

〔註〕人間原理については前出の『宇宙進化論』二四四ページ以下を参照。現在、人類が宇宙の中にいるということは、全くの偶然ではなく、それには「何か深遠な意味が存在する」という立場である。

宇宙は我々人類の利益になるようにデザインされているという見方もある。どういう見方が科学的か——ある証拠に基づいて、何か明確に言えるか、言えないか、どちらと

も確言できないか——と、どういう風に考える(空想する)のが当面幸せか。双方はあまり厳格に関係しない。

各人はどのような宇宙論も描くことができる。「にもかかわらず我われにとつて好ましい宇宙論の一致が多いことには、驚くべきものがある。」「宇宙は生きているか」という本書の問いかけは興味深い(第四章)。

そこで「善の人間主義」も提唱できよう。それは、宇宙の働きは進化する人間を作り出すために一切を積み重ねて来ている、という世界観であり人類観であり人間観である。

『旧約』の「創世記」では天地創造を神の御業とし、人類は地球上の万物の霊長とされたと記すが、これは宗教版の人間主義である。

これらは強い意味の人間主義であるが、これほどまで極端に主張しないにせよ、ともかく人間は宇宙のあらゆる要素のお陰をこうむって生きている——生かされつつ生きているのである——というのは、現代の地球環境時代の世界人類の共通理解ではないか。「生かされつつ生きている」というのは、要するに、宇宙、太陽系、地球系から人類はいのちの要素・善の種子をいただき、それを発芽させ、善の果実を増大させ、一部を消費し、残りを蓄え次の世代に譲るといふ働きである。これは他力的である中で自力的に生きるといふことである。

そこで、道徳とは、宇宙から恵まれる善の種子を受け取り、その種子を発芽させ、育て、果実を生み出し、それを人類のいのちの発展に役立て、子孫・次世代に譲り渡していくことである。倫理道徳の体系は善の生産・増加の観点から、このように意味づけられる。

現代倫理では、四つの公理を基礎とする<sup>(註)</sup>。その上に、もっと高次の道徳原理を積み上げることができ。四つの公理とは、現代の人類社会において、自明の理とされるものである。つまり、

①自律尊重の公理、つまり各人の自律を尊重すること。

②正義の公理、つまり各人の間の公正・機会均等・分配の公正・因果応報の関係。

③無危害の公理、つまりこの世の善を破壊しないということ、破壊部分もしくは欠損部分を補完すること。

④仁恵の公理、つまり契約したもの同士あるいは隣人同士、互いに相手の善を最大化すべきだということ。この四つの公理である。これを以下に説明しよう。

〈註〉ここでいう四公理は、現代社会であれば自明の理であるので公理と名付ける。もともとこれは、ピーチャム／チルドレス『生命医学原理』(Principles of Biomedical Ethics, Oxford University Press. の第三版の日本語訳は成文堂刊)において四原理と呼ばれたものである。以下では、それを現代社会という建物の四隅の土台石とし、その上に高い次元の原理を立てていくという構想になっている。

## (二) 自律尊重の公理

何も現代社会だけでなく、古代においても、また洋の東西にかかわらず、人類は、結局個人個人から成り、各人が自分の意志をもち、自分の人生は自分が選択して行くことを理想としてきた。例えば、釈迦は、弟子たちに向かい、「各自、自分を頼りにしなさい」と教えた。「心に自在を得たり」というのは、我々の念願する境地である<sup>(註)</sup>。

〈註〉釈迦は、「足ることを知り、わずかの食物で暮ら　　まり、聡明で、高ぶるところなく、諸々の(ひとの)家で食うことがない。」(『ブッタのことは』三七ページ)

今日の生命倫理では安楽死補助の問題がなおも議論されているが、「各自は自分の人生・寿命というものを自分

で決める」という自律の考えは、現代社会では人間の根本公理であるといえる。各人は、自分の生き方において、宇宙・地球によって生かされながら、自主的、自発的に生きる「自律」を原理とする。すなわち「自分の意志で、物事を決定し、その結果については自己責任を引き受ける」ということである。

ところで、先にも述べたように、宇宙自然は、人類にそのいのちの元となる「善の種子」を恵みとして無償で与えている。人類は、宇宙から恵みをいただいていることになる。善の種子は無償で生まれ、この無償の恵みを「恩」という。恩恵をいただくことを「受恩」と呼ぶことができる。

この恩と報恩は、後に詳しく述べるように、ほとんど公理というべき重要な道徳原理である。

このように人間は、人類全体もその構成員である個人も、善の種子の恵みにより「生かされ」ながら「生きる」という存在である。いかに自律の人間といっても、恵みつまり恩により生かされているという大前提がある。

その上で、人々は善の種子を増大する。善の生産、蓄え、流通、分配、消費を行う。これが生きるという働きである。人生とは、こうした善の増加の営みにほかならない。

そこで、自律の公理においては「自我没却の原理」というものが重要になる。

善の増加の活動に献身するに当たり、人々は、まず自我（無明・無知の心、とらわれの心）を取り去って、純粹な心となり、自然の法則・社会のルールを正しく理解しなければならぬ。

自我没却とは、人類が宇宙から善の種子を頂いて生きていくうえで、いわばスタートの「精神状態作り」である。それはまず第一ステップとして、真実のすぐれた情報を獲得し、法則に適合・順応する心となることである。無心純心、無我無私のことである。

無我無私の中には、第二のステップとして、他人との関係で自己利益ばかり追求しないで、他者とのバランスを図るということを含む。自我没却には利己心から離れるということを含む。そのうえで、第三に、次に行うの動機・目的・方法・結果の解釈において、善を最大限度に実現するような精神状態になることである。

結果についてどう解釈するかということも重要な点だが、これは因果律のところでも述べよう。

### ③ 正義の公理

正義（正）とは、まず先に述べたように三層のバランスである。正義とは各人が「宇宙の一員」として、宇宙あるいは神仏によって人類に恵まれた善（例えば緑の地球、各自のいのちなどの善）について、

#### ① 人類を含む宇宙万物の間

#### ② またいろいろな生物全体の間

#### ③ 人類の間（先人からの恵みとして知恵知識、物的財、文化一般も加わる）

において、善を増加し、バランスを実現する精神と行為であり、またバランスするように善を配分することである。

ここではまず、何より物質エネルギーのバランスと人類を含む生命系のバランスが実現すべき課題である。持

統的發展の内容がこれに当たる。人類の内部のバランスより以前に、このバランスを壊さないという基準が人類の倫理道徳での根本公理である。

次に、人間界では、正義は物質・生命の調和の中での人間相互の調和（バランス）をいう。つまり正義は人類社会の内部のバランスにかかわる。ここに応報原理というものが浮き彫りになる。この人間界レベルの正義は、以下の三つの基準からなる。

### ①機会均等の正義

これは、人類社会のメンバーが善の種子を発芽させ、善の増大に参画するとき、機会を均等に与えられるというのであって、善の生産への「参画機会の公正」と呼んでよいものである。これは人間界では公理というべき自明の理である。

各人は、この地球上で宇宙自然の法則に従い、人間界での善の増大に参画する。それは物質、生命、人間の善を増大させる働きである。

### ②貢献と報酬の応報原理

次は、各人について、参画貢献の程度とそれに応じた善の配当との関係である。貢献が倍になれば配当も倍になるというように、各人の内部での応報原理である。

例えば、我々は一人一人、心身を与えられ、それをどのように使うかは自律の公理により各人の自由意志に任

されている。健康な身体を維持する努力をすれば、それなりに健康が与えられる。もちろん、自然環境、社会環境、親祖先からの遺伝の作用はあるが、それらの与件の中でなお各人の努力の効果は決定的である。

正常な努力・献身は、それに応じた効果を与えられる。これが私的善の領域での私的な応報原理である。人類社会を成り立たせてきたのは、こういう意味の応報原理が自明の公理であるという共通観念である。他人のものを不当に盗んではならないという掟は、この公理の適用であり、献身なしの報酬はありえないことだ。『聖書』に出てくるパウロの言葉、「働かざるもの食うべからず」というのも、おなじくその一つの適用である。

### ③各人間の公正な応報原理

こうした各人の私的な応報原理は、宇宙自然の法則が作用して各人に現れてくるものであるが、次に社会の仕事が公正であれば、各人の間でも応報原理は公正に作用することになる。『応報原理の個人間での等しさあるいは比例』ということである。

この均等性もしくは比例性もまた、人類社会を成り立たせるうえで不可欠の標準であり、社会秩序の根幹である。正当な労働・社会への貢献とは何か、それに対する正当な報酬・待遇とは何か、についての決まりがそれである。

そうした社会の根本秩序を公式に表明するのが憲法 (constitution, Grundgesetz) というものである。そこには、人間——近代社会では個人主義だから個人——とは何かを規定し、個人の特質、権利義務などを根本におき、

同時に国家の基本法であるから、国家における個人の位置付けとしての国籍規定——国家における私的善の所属・所有としての国民についての規定——を与え、かつ社会公共的な善に関する規定が必ず盛り込まれる。また国家の公共的善とは「領域」(territory)である。

#### (四) 仁恵・慈悲の公理

次に、現代社会の倫理道德の公理は、仁恵、慈悲、愛である。これは正義の実現を目指し、正義を標準として善の増大に献身することである。ここでは慈悲という伝統的な言葉を採用しよう。仁恵の公理は慈悲の公理と呼んでもよい。愛の公理、隣人愛の公理という名称も成り立つ。

慈悲は、慈と悲という二つの側面からなる。

慈は、万物を育てる働きというように理解されてきたものである。それは、地球の保全を基礎として、まず物質エネルギーと生命界のバランスを守り、人間相手では相手の真の利益、満足、喜びを増加し、いのちをより健康やかにする。

ただし、ここで注意すべきことがある。我々人類は「生きとし生けるもの」を愛するというように、すぐに生命系にのみ注意を向けるという癖がある。しかし、生命の基に物質エネルギーがある。それを攪乱しないことが、我々人類の考慮すべき基本原則である。いな、原則というより公理というべきであろう。<sup>(註)</sup>

〔註〕持続的発展の基礎となるべき我々の生活原理の確立は容易ではない。

「生きとし生けるもの」までしか届かない愛の光では、今や不十分なのである。「マスコミが好きな『地球にやさしい』行為さえ徹底して行われれば、人類はさらに発展を続けることができるだろうと思うわけだ。」「しかしながら、リサイクルという考え方には『資源を効率良く利用する』との

発想はあっても、『人間社会で使用される総量を規制する』との思想が含まれていない。」

ここから「レンタルの思想」が提案されることになる。地球と人類圏は貸し借りの関係にあり、人類は借りている地球について、地球本体を壊さないように、用心深くつつましかかに使用し生活しなければならぬ。松井孝典、前掲書、五二―五三ページ。

古来の宗教などに説く倫理道德では、この点についての配慮が足りない。人間圏が肥大せず、人類の生きる活動が地球を攪乱するというような事態が発生しなかった時代のせいであろう。

しかし今は、愛とか慈悲というものを考えるには、地球のバランスを壊さないということが何にも増して公理とされねばならないのである。倫理道德というものは、人類自身の活動と環境との相互関係により、内容が変化するのである。その変化を引き起こす主要因は、現代では科学技術なのである。

人類においては、万物の調和をはかりながら、「子孫繁栄」に努め、「持続的発展」に向かうということが、究極の目的であり、慈悲の働きの目指すところである。

他方、慈に対する悲とは、「万物を癒す働き」である。物質も、いのちも、人間は、弱くはかない、誤りを犯しやすい存在であるから、寛大と許しと癒しが必要なのである。

倫理道德においては、すべてを善の生産に向けて献身するのであるが、同時に人間は「弱いもの」で、正義基

準を厳格には守れないという人間性弱説が基礎となるべきである。シェークピアの『ヴェニス商人』での「シャイロック」が、なぜ無慈悲の典型として批判されるのかを考えて見られたい。それは、人間は弱い存在であり、間違っている存在だからである。

ここから、人間を相手とするとき、以下のような慈悲の精神と、行動での配慮が必要となる。

- ①すべての人の善を増大させること。だれも排除しないという原則。
- ②一人一人を、個性に応じて、しかも公平な機会を与えて育てる心。
- ③すべての事を建設的に。一切の精神と行為を善の増加につなげることを建設的という。
- ④温かい思いやりの心。相手の立場、希望、苦しみ、悲しみを思い、相手のいのちを扶助する心を徹底すること。
- ⑤信賞必罰。しかしある程度失敗も許し、待つ心をもって対処し、再起をはからせること。
- ⑥寛大な心。異なる価値観、異なる善の選択を認め、受け入れる。
- ⑦他者の欠陥を補う心。

これらは皆、人間が「弱いもの」という認識から出てくる配慮であり、親心である。

もしも人間が「機械のように厳格に」考へ行為できるのなら、こうしたゆらぎとか、ゆとり、許し、寛大、思いやりなどは必要なからう。

機械の欠陥では、「他者の欠陥、我これを補充す」などといって寛大に許して放置してはならず、すぐに修繕しなくてはならない。早くしないと飛行機は墜落する。人間という「機械」は、そうはいかない。弱いし間違っている。しかし幸いにも、人間は自己修正し向上できる存在でもある。機械にはそれができぬ。

#### (四) 無危害の公理

人類は、人類社会の個人的善及び社会的善を増加させるのみでなく、同時にそれを害しないと言う意味での「無危害の原理」を裏の公理とする。現代生命倫理では医療過誤の問題がやかましくなっている。何も現代に限ったことではないが、契約当事者は相互に相手の善を最大化するという義務を負うし、少なくとも善を破戒したり、毀損してはならない。

人類の社会生活では、さらに契約当事者である範囲を超えて、他者について、先に掲げた私的善と社会公共的善を破戒・毀損しないことが大前提となる。

それゆえ、バケツに水を溜めようとするれば底に空いた穴をふさぐことが先決であるように、倫理道徳においては善の底の穴を埋めねばならないのである。ここから「義務先行」の原理というものが浮かび上がる。

義務先行とは、善の欠損を補完し権利を正しい方法で行使することであり、そうすることによって善の総量が増加し、権利がよりよく実現するのである。

義務とは責務とも言い、自然・宇宙・神仏などからのニーズに応えること（応答すること）、レスポンス、response できること）である。



応答すべきニーズの内容は、宇宙自然、その法則、神仏、その心の現れ、である国家社会や親祖先などから無償で恵まれつつある善(恩)を壊したり(破壊の罪)、十分増大させないで怠けていること(不善、不作為の罪)を修復し、補完することである。

このように見ると、義務にも、基本的権利と対応して「基本的義務」があることになる。それには、次のものがある。

- ① 宇宙・地球の善(環境)を尊重するという義務
- ② 各人の権利(私的公共的善への参画の権利)をお互いに尊重する義務、また各人がその権利を公正な方法で行使する義務
- ③ 善の毀損という悪を払い欠陥を補完する義務
- ④ 進んで善の増大をはかる義務

こうした義務遂行によって各人の保有する権利は実現する。義務は、善の生産についての権利を正しく実行して欲しいという宇宙自然と人類社会のニーズに応答することである。義務・責務とは応答のことである。

義務を果たせば、人類に恵まれた「善」——善は権利。権利 *rights* とは善、またはそれを得る資格・力をいう——を与えられる。

基本的な権利は、宇宙自然・神仏から万人に可能性として平等に与えられ、各人は権利を「保有」する。これ

を天賦人權という。しかし、権利はそれを「正しい方法」で行使するものでなければ「実現」しない。この正しい行使が義務先行に含まれる(社会制度や文化のゆがみを正すことも含む)。

例えば、各自の立派な生命を、不摂生を続けて破損するのでは、せつかくの健康になれるというみずから天賦の権利を正しく行使せず、健康という天賦の権利が実現しないことになる。

天賦の権利の「保有」と、自己の権利の「正しい行使」とは区別しなければならない。宇宙神仏の恵みである権利(正しい善)の「正しい行使」(応答)が義務(責務 *responsibility*)である。(しかし、遺伝的に病気になる人、身体障害をもって生まれる人、伝染病にかかる人などでは、その理由と問題解決を、どう関連づけて理解すればよいか。個人の権利の正しい行使とどう関係するのか。検討を要する所である。)

なお、説明責任(アカウントビリティ *accountability*)ということ、自己の行為の正当なる理由を他者に説明することのできる能力、責任、をいう。この責任遂行も義務先行に含まれる。

この義務先行原理に少し説明を加えよう。

一般に、(宇宙の善の)果実そのものを権利といい、またその果実から受益する資格も権利という。これには、各人が能力を発揮して善の生産と分配に参画することを含む。人類社会における各人の労働の権利は、労働の義務と裏腹の関係にある。

この基本的権利は、宇宙が人類全体と各人に与えているものである(天賦人權)。人類はその天賦人權を正し

く理解し、本当の人間尊重の精神を確立しなければならぬ。  
しかし権利は、善を生産する働きを先に行つてのみ、現実の結果として実現する。その働きを義務という。例えば、人類との中の各人は、大気を呼吸する権利を持つが、大気汚染を進めたり煙草を吸って汚染すると、その権利が実現しない。

結果としての善を生産する「途中での働き自体」(善への権利の行使)もまた、それ自体として善である。例えば、人間のいのちという善に役立つ食料の生産活動も善の働きである。権利行使の方法もまた、善でなくてはならない。

果実とそれへの受益権である権利は、基本的なものは「基本的人権」として自然に与えられているが、それは正しく行使するときのみ実現する。こうして、無危害の公理は、義務先行の原理というものを含む。

#### (六) 恩と報恩の原理 — 恵みに応答する —

これは、高次の倫理道徳を実行する上で、公理としてもよいほどの原理である。世界の倫理道徳を少しでもひとつとくと、ある文化では強く力説され、ある文化では軽く扱われているものがある。しかし、どんな文化でも無いということはないのがこれである。恩と報恩である。

初めのほうで述べたように、我々は、宇宙自然から恵みをいただいているからこそ、こうして生きている。恵みは、宇宙・神仏に始まりその生命の働きを継承し、宇宙的な善(恩)を生産し、無償で後世に譲り渡してきた

人々の系統の働きがあるおかげである。

我々の先人は、宇宙からいただいた善の種子を発芽させ、歴史として積み重ねて来た。人類はそういう伝統の中でも「善の伝承」のお陰を受けている。

そこで、歴史の上での「伝統」とは、時の流れの中での物事・出来事につながりであるが、そのつながりの中心は、善を生産し運ぶ働きと、その働きをする先人のつながりである。歴史とはそうした伝統(つながり)なのである。歴史なしには現在も未来もない。

例えば、あの学校は伝統的に良い教育をするという場合、創立者以来の指導者の優れた働きのつながりがあるものである。下手な指導者に交替すると、そういう伝統でも乱れることがある。我々の伝統というものの核心は、単なる物事につながり・流れというより、優れた指導者のつながりなのである。

ここで、「伝統」(歴史中の善生産のつながり、系列)というものの倫理道徳的な意味付けが新たに浮かび上がる。「新たな意味での伝統」とは、歴史の流れにおいて善の種子を人類社会に運ぶ先人のつながりであり、そういう先人は人類共通の恩人であるといえる。その恩人の系列を一体として新たに「伝統」(善の恩人の系列)と呼ぶ。この系列が歴史の伝統というものの中心系列である。

伝統には、基本的なコミュニティとしての家族の親祖先の系列、国家の恩人の系列、精神生活での恩人の系列、物質生活での恩人の系列がある。それぞれは「いのちのコミュニティ」での先人の系列である。

〔註〕人類社会に関するこのような見方そのものが、一つの「価値選択に基づいた事実認識」である。「人類社会というものはこういうような構造になっている、またこのような理想を目指すべきだ」という「価値判断を含む認識」である。

なぜなら、我々の人類社会は歴史を持つが、その歴史とは先人のいのちの活動の連続であり積分であり、そこには人間のどろどろした欲望、強弱の良心、高下の価値理想が入り交じっている。歴史は価値から自由な単なる事実の出来事ではなく、こうした歴史なしの「現代」社会というものはあり得ないからである。

異なる認識を取れば異なる社会理論ができる。人類社会のとらえかたは、「どついうものが理想か」という視点を離れては、成り立たないのである。

例えば、民主主義が善いとすれば、国是として民主主義を採用することになり、それを理想として実現に努力することになる。そして、おおよそはその理想に向かえるが、無理が生じれば修正することになる。家でいうならば増築である。

ヨーロッパでは、スエーデンなど民主主義と結び付いた

さて、善を最もよく生産するには、伝統の善を生産する働きに感謝し、その働きをよく理解し、善を生産する真正の精神と働きを受け継いで行くことが基本である。いわば親が子供を育てる心である。

親の心を受け継がない子供は、自分が親になったとき低い次元から出発せねばならず、子育てに迷い、ストレスを蓄え、あげくの果てに子供虐待に走り、さては自分のいのちの後継ランナーを殺しさえする。

核家族は、祖父母からと、地域社会からとの、貴重な情報・知恵をややもすれば切り捨てるシステムであるので、それを補完するシステムを新たに構築しなければならない。

人は、歴史と恩（恵み）を無視すると、すぐさま低いレベルに落ちる危ない存在なのである。人類は遺伝子のみでうまく育つようには、十分な情報を与えられていない。

仏教でも、儒教でも、キリスト教でも、人類の生き方を説くのに、家族モデルを使うことが多い。母親の慈愛とか、父なる神の愛とか、天は父、大地は母に譬えられるなどである。倫理道徳を、人類は家族という最も身近かなところから構築したのであろう。

そこで、恩に対する報恩とは何だろうか。それは、次のような柱からなる。

- ① 恵みを運んでいただいた恩人には、深く感謝し孝養を尽くす。
- ② 故人には、感謝の祭りを行う。故人には、その恵みに感謝し、靈魂に感謝し祭るのである。以上は、「溯及」的報恩である。いわば源に帰り、水源地を大切にすることである。

君主制がいくつも存在する。大英帝国はアメリカと異なる立憲君主制をなお保持し続けている。アメリカの建国の父たちは、一七七六年に、このイギリス・モデルに反旗を翻して独立宣言を発し、共和制の家（国という家）を建てたのである。

アメリカでは、独立宣言と憲法に国家の理想像（個人主義、自由主義、連邦主義、国家主権の相互平等）が描かれた。しかしその後、南北戦争、ニューデイル、一九六〇年代と、いくつかの段階を通過して公民権、女性の位置、言論の問題、中央政府と州政府との関係などに関し、多くの憲法修正条項が加えられたのである。

理想というものは、周囲の条件により栄養の状態が変わるから、自身も姿を変えねば生き残れない。

日本の歴史でも、古代からの律令体制という基本枠組みは変わらないままだったが、鎌倉・室町、江戸と幕府体制となり、それに応じた哲学を打ち立てるなど、国家の具体的システムは時代状況に応じて移り変わった。明治維新もその一つであり、一九四五年の敗戦による変革もそれであった。あれから五〇年、今、日本はもう一度、国家と国家哲学の変更を迫られているのである。

③また、生存者の恩人には、奉仕し、善の増大に努めつつ天寿をまっとうしていただく。  
④この点、詳しく述べると、生存の恩人には、尊敬し、安心と喜びをもっていたいただき、孝養を尽くし、善の生産に勤しみつつ人生の最後まで天寿をまっとうし、元気で善を増やし続け報恩し続けていただくように、孝養を尽くす。

⑤みずからは、恩人の意志と働きを受けて善を増加する。これは「育善」的報恩と呼ぶことにする。  
⑥善の果実を後世に譲り渡す。「推譲」的報恩と名づける。これは報恩の完成である。

人類は恩人・伝統の善生産の精神と働き、善の遺産を受け継ぎ（受善）、新たに善の生産を行い、いのちの次の世代を育て（育善）、善生産の精神と方法を教え、後世に善を譲り渡す（譲善）。

我々は、こうした働きを通じて、宇宙的な善の継承創造を、人類世界において続けることになる。

#### (七) 精神善の開発

いのちは、他のいのちと交流することなしに長く生きることができない。特に心というものの交流なしに、幸せという究極の目的善は実現しない。ゆえに、人間にとっての善のうち、「精神の善」（心の善い働き）は、あらゆる善を増大する決め手となる。

そこで、「知恵」（知恵は善増加の根本力であり、これが人類社会の善の生産力の中心）の開発、「知識」の学習、感情の浄化、良心・意思の向上、他者の精神善の開発発展を行う。

これは最高の善事であり、最高に有効な善増加の方法である。

知恵は叡智（知）ともいう。それは、精神善の中核にある知恵・叡知であり、知識、感情、意思を導き、全体としての善を生産する「舵守」である。

善の核心は、「善を生産する精神」であり、またそうした「精神という善」を、自分についても、他者についても生産することである。これは、宇宙と伝統を通じて得た善の種子を元手に、人間の精神の中に「善を生産する精神の種子」を作ることである。これを人心の開発・救済ということができると、二宮尊徳翁にならない、これを「心田開発」と呼ぼう。善生産、報恩の一切の元は、精神善の開発にある。

人類社会での精神的善の開発は、やがて開発された人の精神の中に、宇宙の働きと伝統の働きに通じる働きを自律的に発動させ、その人が自分から進んで善の生産に献身するようにさせる。そうすると、その人は「宇宙の一員」として宇宙の働きに同化し「救われた人」になるのである。

世にいう「救われた人」とは、このように宇宙の法則に基づき、伝統の働きを継承して、次世代のいのちを育て、善を生産し推譲する報恩の人である。

〈註〉釈迦は、次のように述べる。

「みずから自分を励ませ。みずから自分を反省せよ。修業僧よ。自己を護り、正しい念をたもてば、汝は安楽に住するであろう。」

「実に自己は自分の主である。自己は自分の帰趨である。」

故に自分をととのえよ。——商人が良い馬を調教するように。」（『ブッダの真理のことは、感興のことは』 岩波文庫、六三ページ）

釈迦の悟りは、徹底した個人の自覚である。そうして独死独生を徹底する中から、生きとし生けるものにまでの愛

を説くのである。何故愛を説くのか。愛なしにいのちは生きられないからである。これは事実である。しかし、人類はこの事実<sup>注</sup>に足を取られ、心を奪われる。

宿題は永遠に尽きない。尽きせぬこと、浜の真砂を超えらるのである。

#### 四 善、倫理道德及び因果律

##### (一) 因果の予測可能性

倫理道德論には、因果律論が当然必要となる。なぜなら、何をどうすれば善が増加し悪を減らせるか、を解明しなくてはならないからである。それなくして、倫理道德は人生の指針とはならない。その指針は、精神作用を含めて、「こうすればこうなる」という行為の「予測可能性」を高めるものでなくてはならない。

倫理道德の科学では、善（及び悪）が原因となり、善の生産がどのように行われ、または善がどのように損なわれるか（悪の生産増大）を解明する。宇宙自然の法則のからみあいの中でそれを解明しようとする。最近の遺伝子研究も遺伝子工学も、結局はそこにねらいがある。

そこで因果律論では、一般に次の前提を置くといえる。

##### ① 因果論

出来事を原因と結果の因果的關係（法則）の観点から理解する。「こうすれば、こうなる」という予測可能性を確実にし、予測的中率を上げたいのである。<sup>注</sup>

〔註〕江戸末期に、厳しい武士支配の下、商業主義の浸透の風に吹かれ、苦しい生活の中で自暴自棄に陥った農民の指導に効果を上げた、二宮尊徳翁は述べる、  
「それ運というは、運転の運にしていゆる廻りあわせという物なり。その運転は世界の運転に基元して、天地に定規あるがゆえに、積善の家に余慶あり……因縁の道理これ

なり。……三世を観通すればこれ疑いなし。声もなく香もなく常に天地は書かざる経を繰り返しつと云わる、四時行われ、百物成るところの真理をいう。」（『二宮翁夜話』岩波文庫、五五ページ。少し現代訳にした。）  
自然界のみでなく、人間界にも、因果律が貫徹するといふ見方への確信が表れている文章である。

##### ② 斉一性

いつでも、どこでも、同一法則が作用している。日本列島ではこうだが、アメリカ大陸では成り立たない、という法則では困る。できるだけ同じであってほしい。しかし、文化が違うということは、この斉一性が成り立ちにくいということを示す。だから、「ローマに入りてはローマ人のごとくせよ」（郷に入りては郷に従え）ということになる。これは、和の文化行動であり、文化的コンフリクトから生まれるリスクを回避する一つの方策である。

現代の世界標準（グローバル・スタンダード）の運動は、文化的差異を無くそうとする意図を持つものである。

##### ③ 無矛盾性

自然界ではもちろんだが、人間の世界でも、法則の世界には矛盾する物事は存在しない、そうありたい。歴史上、この問題に関する事例には事欠かない。

例えば、倫理道德でも、孝行と忠義との間に矛盾があったので（平重盛の話）、それを矛盾しないように理解す

る努力が払われた。

先人が、しばしば「大義名分論」を説いたのは、何が大義かを解明し、それに従うことが倫理道德の矛盾を克服する試みだということである。

我々は、戦争に行けば、往々にして戦死する。本人はもちろん、家族も、社会も、国家も、その戦死をいかに合理化するか、正当化するか、意味付けるか。これは重大問題である。個人のいのちは最高の価値であり善である。それは、国家に奉仕することと、どのような関係にあるのか。

矛盾すると思う人は、兵役拒否の行動をとった。理科系の学生は出征を遅らせてもらえたという。そうしたことは公明正大なフェアプレーであるのかどうか。

ともかく、各人が宇宙の一員であると理解し、国家及び家族の一員であることを、倫理道德の中で矛盾しないように意味付ける工夫が試みられたのである。ひとえに、無矛盾性の要請からである。

倫理道德というものは、矛盾をはらんでいてはならないのである。

## (二) 善悪因果律の線形的な理解

因果律論とは、「いのち」という目的善を増やしたいという人間の願いを実現する上で、見通しをつけるものである。だからそれは法則論という性質を持たざるを得ない。単なる教訓では人々は満足しないだろう。教訓は、自明といえるほどに確実な妥当性を持たねばならない。そこで、因果律的な解明・裏付けが求められるのである。

薬には、どのような効果があるか、証明がなされなければならない。できれば科学的な支えが欲しい。効能書だけでは多くの人を納得させられない。

ところで、世間の倫理道德は利己心と利他心を適宜混合して作られている。

「セクターラインを超えて対向車の車線に入るべし」

「お酒を飲み、かつ居眠り運転をせよ」

ということは、まさか交通ルールとしても倫理道德としても、ともに成り立たないだろう。誰しもまず自分のいのちが惜しいからである。他人のいのちへの思いやりもある。

「地球上をどこでも麻薬禁止にすべし」とはいえる。

麻薬のマイナス効能がはっきりしているからである。だが、

「地球上をすべて禁煙にすべし」

をめぐっては、論争が起きるだろう。価値観の相違があるからである。

そのとき、人類は、善を増大するという大目的の下、法則のところまで共通理解できる確実な倫理道德を求め。

法則上は、各々の原因ごとに、それぞれ別々に結果が生まれる。そして人々は、以下のように、人間の人生はそれらを総合した作用と結果からなると見る。

①自然界の法則（物理の法則と生命界の法則）

人はいう、

天網恢々疎にして漏らさず。

ウリの蔓にナスビはならぬ。（遣伝子工学は、これがある程度、変更する。）

毒を飲めば死ぬ。

曲がれる杖には曲がれる影あり。

種を蒔いたら刈らねばならぬ。

これは、人類は、原因を作ったらその結果が出るという法則世界に住むのだから、結果を受け止めねばならぬ、という指針といえる。

②生理の法則

例えば、たばこ吸いは、吸わない人より、ガンになる確率が高くなる（ただし、ガンにかからないようにする要因も同時に作用するので、おおよその確率としてしか言えない）。不規則な生活をするると体調を壊す。いつも腹を立てる人は、ついには自分の体を害す。腹八分目は健康の本。こうした現象は、自然界の法則が人体に現れた傾向的現象といえる。

③心の法則

いわゆる積極思考は、気分を一時、明るくし、人々を元気にする。続けられ、さらに効果が上がる。これは、

多くの人々が求める心の法則であり、技術であろう。

継続は力なり。

善き心の継続は、善き力なり。

志しある者、事ついに成る。

人は、自分がなりたいと思う像に近づいて行く。

楽しいと思えば何にでも楽しくなる。

いつも心に笑みを保つことは健康によい。

楽天は長寿の本。

「幸福になろうと欲しなければ、絶対幸福になれない。」（アラン 神谷幹夫訳『幸福論』岩波文庫、三三二―三三二ページ）

自分の喜びは、自分が作るものである。

④社会の法則

しかし、人類社会は自分だけの空間ではない。側に他の人がいる。自分だけの思いどおりにはいかない。道の歌に言う、

だれにも利益を吹き与えないような風は悪い風である。

風が吹けば、桶屋が儲かる。

悪事、千里を走る。（善事も千里を伝わるのではないか。）

法律の無知は、何人も容赦しない。  
雌鳥は、鳴かないと卵を産まない。(家庭という社会では、妻という女性が口やかましいくらいでない、家がかまく行かないものという意味?)

人類の社会空間は、高度な複雑系であろう。進化とは複雑系になることであるともいえるが、こうした自分と他者とのせめぎ合う空間の中の格言、箴言、道歌には、ままならぬ浮世への嘆きも言い表されている。  
人々は仲間うちにも、広い世間にも、何とかして法則を見出し出そうとしてきた。一番滑稽なのが「投機」の研究である。その結論は平凡極まりない。一番安全な投機とは、あまりに大きなリスクを追わないし、また負わぬ投機である、と。

世界の大勢は投機全盛時代である。その大局・大勢に逆らって正道を歩むにも、投機の「研究」で後れを取ってはならない。日本軍の失敗から学び、「大局観」、「情報感覚」、それに「科学性」の必要を早くから力説してきた著名コンサルタントもいる(西順一郎「思想のある経営」ソーテック社)。この金融工学といったリスク研究の領域が、平板な結論に終わらないことを祈りたい。

### (三) 善因悪因の複雑系

人生では、善因と悪因との差し引き計算で、現象(結果)が生まれる。むろんそのとき、自然環境、社会環境、そして親祖先の影響、自分自身の精神と行為がからみあって、善因、悪因として作用する。これは一応、科学的な法則認識である。倫理道徳論の科学である。しかし、ここには以下のような人間界の特質があることを忘れてはならないだろう。

#### ① 現象の一過性、出来事が交替すること

ある時点で善いとか悪いと思われる現象が起きても、時間がたてば善い現象(晴天)も悪い現象(嵐)へといたる途中の現象に過ぎないことがある。我々は、一筋縄で考えないと同時に、短期の見方にこだわらないほうがよい。先人のいうとおり、「物事は長い目でみなさい」ということになる。

ただし、考え方を交えることの「即効的効果」は見えないように。そのときの問題は、効果が持続するかどうかが、また、どこまで問題解決に有効か、である。

ここには、格言が沢山ある。それらは人類の知恵であるとともに、悲哀感の表白でもある。

有為転変は世の習い。

晴れのあとは雨、雨のあとは晴れ。

滄海変じて桑田となる。

因果は巡る。

終わり善ければすべて善し。

途中困難、最後必勝。

② 悪果が善果への因ともなること



その逆もある。悪いと思われる出来事が偉大なる善の原因になることもある。悪い現象も善い現象へと至る途  
中の一過性の現象であることもある。病気になる、懸命に治療する、お陰で生活習慣が改まり病が治る。  
苦あれば樂あり。

曲がり角のない長い道はない。(不幸災難はいつまでも続くものではない。)

③善果が悪因ともなること——人間心理の微妙さ——

善い現象が起きると、かえって傲慢となり、油断して、転落の運命となる。

月満つれば即ち欠く。(有座の器)

知識は人を誇らせ、愛は徳を樹てる。

好事、魔、多し。

創業は易く、守成は難し。

もしも人類が全能の神に近づき、完全に情報を獲得することができたら、こうした予測不可能性や不確定  
性にかかわる格言は、その多くが消え去るのかもしれない。しかし人類は限られた知能の持ち主でしかない。我々  
は、「分かることが増えれば増えるほど分からないことも増える」という特徴をもった世界の住人のようである。  
このジレンマは人類に与えられた宿命ではないか。

(四) 因果律の主観化——ものはとりよう——

人間はおしなべて弱き者である。弱き者のための律(法則、運命とその説明、物事の納得の仕方)が因果律と  
いうものにはなければならぬ。強いと思う人は傲慢となり、その末路は哀れである。「柔和なる者が地を継ぐ」  
というのは、古今を通じて変わらぬ真理である。

人間は、物事が全部、分かるわけではない。善悪の判断も定かではない。時代により、状況によって変わる。  
また、物事の法則が一応分かり善悪が分かっても、それに完全に沿って行動することは容易ではない。だから、  
善悪の因果は変動する。予測違いが起こる。見通しも狂う。

善悪の物差しは、しよせん、自分自身の近視眼的で短期的な、あるいは利己的・自己中心的な、物差しに過ぎ  
ないのではないか。また、他の人は、自分と異なる物差しをもつ。だから世の中では必ず、物差し同士がぶつかっ  
て、どうしても争いが起きてくる。

ゆえに、自分の善悪の見通しが狂い自分の決めた実行が阻害される。投機屋たちを見よ。たえず、性懲りもな  
く儲けと損を繰り返すではないか。

こうした幾つかの種類の限界を、人類はいかにして乗り越えられるのか。

結局、人間には、石橋を叩いて渡る「ピースミール法」(微善の積み重ね)しかない。人間世界の、とくに道徳  
的な意味での因果律論とは、その石橋を叩きながら渡る歩みの積分を述べるものであるといえる。

そこで人類は、もつと徹底した解決法を見いだし実践してきている。人生行路上の出来事を、出来る限り善悪

の法則に基づいて説明し、それで納得するのだが、そこにとどまらず、出来事に関する意味解釈によりそれを越える道を用意しているのである。

これは現象・結果の受取り方の変換により、納得の仕方を変え、安心の仕方を変え、喜びの獲得を可能にするのである。「心頭滅却すれば火もまた涼し」という和尚の言葉は、その極致の一つである。

人間界では、好き嫌いや善悪についての意識というものが作用する。「こうすればこうなる」「こう考えこうすればこうなる」というとき、善悪の標準を定めなければならない。だから、倫理道徳論での因果律論は、自然科学的の意味での客観的な因果律論と、人間の価値判断とを含む主観的な因果律論という二重の見方の統一なのである。

例を挙げよう。夕焼けは、自然科学的に見れば沈む太陽の光線の角度が、独特の色彩を生ぜしめるに過ぎないが、人間の、多分に社会の公共的善である文化の背景を帯びた判断では、同じ夕焼けでも、

「夕焼けは自然の恵み、美しいな」

「あーした天気になーれ」

「いやな予感のする赤い雲やけどな、何事か起きるかな、心配だ」

「明日は、海が荒れるな、漁に出られないな、困るな」

というように人間の側からの判断・感じが、様々に別れてくる。

また、子供が欲しくないという価値観を持つ人にとっては、「子孫繁栄」というような価値を幸せの条件として期待するなどはナンセンスの極みとなる。一体、パラサイトシングルの人々たちは、そう考えるのだろうか。

あるいは、「健康」で医者いらずの人には、健康を実現するということの倫理道徳上の価値は、普段、意識にさへ上らず、それが道徳的目的などとは考えないであろう。その自信も、必ずいつか崩れるのだが……。

意味上の受取り方次第で、悪い現象でも何でも、一切が「良い意味」のものに受け取られる。つまり、一切は、心が決める。

意味解釈を通じて、一切を善に転換する。

「われ幸いにして病を得たり」「天の知らせ」「天の恵み」「これ神仏の恩寵なり」

極めつきは、善悪の因果律では、結果の意味解釈の転換により、一切は善の意味をもつ、というように意味を変えることができることである。これが人間の世界での、「善悪から見た道徳」の因果律の極致なのである。

「幸福と感ずることが幸福なのである」というのは、人間界の不滅の真理なのであろうか。

#### (四) 人間の因果律の超越

ところが、「運命は天命なり人為を超越す」ということもまた、真実である。つまり、意味解釈でどうにも片付けられない事態に陥ることがある。その時には、一種の「信仰」に頼ることになる。その心の持ち方には、次のようなものがある。

① 現世での人間の超越を信じる。いつかは事態が好転する、と信じる。  
 ② 天命・天道などと言われてきたものを信じる。「深く天道を信じて安心立命」と考えるのである。人間は希望を持たなくては生きられない。

③ あるいは人格的な神仏を信じる。

「悩める者よ、我が名を呼べ、我、汝を助けむ。」

「求めよ、さらば与えられん。」

「叩け、門を。汝のために門は開くであろう。」

このように、思いどおりにならない現実の谷間で喘ぎ、嘆き、悲しみ、悩む人々に応えることを主とするのが宗教である(傲慢な人にも呼びかけているのだが、気がつかない)。そんなときに人に慰めを与え、いのちを回復させる、いのちに意味を与えるのが、古来、宗教なのである。その役割を認めない人は弱い。心の肩を怒らせ、堅い心を作ることで、辛うじて毎日を生きているだけである。強がりで生きているだけである。

④ 来世での結果までも視野に入れて、来世での結果の成就を信じる。「極楽に往生する」「天国に行く」などは、

古来の人類の知恵であろう。

⑤ 「宝を、天国に積みなさい」というタイプの箴言もある。「積善の家に余慶あり」という中国の古典の言葉も、不滅の戒めであり、また希望の言葉であるといえよう。

しかし、人類の倫理道徳には、地球環境問題から始まって究極の問いが提起されている。すなわち、地球が地球自身の運動によって変化すること、ついに人類が灼熱の太陽に呑み込まれる、という「物理的宿命」は、果たしてどうなるのだろうか。人類は不滅なのかどうか。そこまで視野を伸ばしたとき、我々は、善悪の考え方を、どう変えるべきであろうか。

されど、所詮、人類の倫理道徳論は、聖人のそれといえども、人間中心主義のもの。つまり、「人類がいつまでも生き延びたい」という願いの現れである。「それで善し」。私は、今のところ、このように結論せざるを得ない。読者諸兄は、いかがお考えであろうか。

どうも、物事が分かっていくということは、分からない問いをみずから創造することであるようである。我々は、宇宙自然の中に生を受けたのであるから、そうした性質をそなえた宇宙自然の成り行きに従うほかない。

「さかしらな人類知」による善悪区別は乗り越えられるべきであろう。

これからの人類のモットーは、「宇宙自然の中での絶対他力、絶対服従、そこに絶対自律あり」ということになろう。

※この論稿が出来上がるうえで、望月幸義教授(麗澤大学、倫理学専攻)のいつもながらのご厚意に篤く感謝したい。この度も、多忙の中にもまったくスピーディーに、善の概念などをめぐり、メモ書きの草稿段階から、細部に至る批判的意見をいただき、推敲にとってまことに有益であった。今まだ教授のご教示を十分に生かし切れていないが、今後さらに思考を重ね、「善アプローチ」による倫理道徳理論と実践指針の構築を進めていきたいと心に期している。含まれる誤

りは、むろん私のものである。

また、諏訪内敬司教授（杏林大学、教育学専攻）には、倫理道徳関連で、いろいろと文献をご教示いただいている。立木教夫教授（麗澤大学、物理学）には、自然科学にかかわる事項について、しばしば素人の質問に答えていただいている。心から感謝する。

ソクラテス先生の教えのとおり、対話は、独りよがりを超えて真理に到るための王道であり、若い人間を育てる精神的アゴラであると思う昨今である。ソクラテス先生の教えは、したがって古典は、今に生きる。

〔参考文献〕（日本語版のみに限定）

- (1) アミタイ・エチオーニ『新しい黄金律』麗澤大学出版会。
- (2) アリストテレス『ニコマコス倫理学』全集または文庫版、岩波書店。
- (3) イエス『聖書』各種版あり。
- (4) 市川惇信『ブレイクスルーのために』オーム社。
- (5) エーリツヒ・ヤンツ『自己組織化する宇宙』工作舎。
- (6) 孔子『論語』岩波文庫。
- (7) ジョン・グリビン『宇宙進化論』麗澤大学出版会。
- (8) ジョン・ロールズ『正義論』紀伊国屋書店。
- (9) 鳥海ほか『地球システム科学』岩波書店。
- (10) 中村元訳『アッタのことは』、『真理のことは』 感興のことは』岩波文庫。
- (11) 永安幸正『政治経済学』成文堂。
- (12) 西田幾太郎『善の研究』各版あり。
- (13) 二宮尊徳『二宮翁夜話』岩波文庫。
- (14) ビーチャム／チルドレス『生命医学倫理』成文堂。
- (15) 広池千九郎『道徳科学の論文』（一―一〇巻）モラロジー研究所。
- (16) 深谷ほか『善の本質と諸相』昭和堂。
- (17) 松井孝典『二万年目の人類圏』ワック出版社。
- (18) 村井実『善さ』の復興』東洋館出版社。
- (19) J・E・ラブロック『地球生命圏』工作舎。